

松本深志「応管」31人声高く

この2年で人数倍増 伝統の応援スタイルで存在感

第108回全国高校野球選手権長野大会4日目の7日、長野オリンピックスタジアム（長野市）の第1試合に松本深志高校（松本市）が登場した。スタンドでは応援団管理委員会（応管）の31人が、学ラン姿などで声援を送った。伝統の応援スタイルを守りつつ、「厳しい」イメージの払拭へ工夫を重ね、この2年でメンバーの数は2倍以上に増加。試合は敗れたが、力を増した応援で選手たちを盛り上げた。

高校野球 長野大会

ランコロンー。試合開始30分前、スタンドにげたの音が響いた。歯が30秒余りある高げたを履いた第74代応援団長の橋本璃子さん（18）のもと、息のそろった応援が始まった。

橋本さんが入った2年前、メンバーは12人。当時は「1学年で5人いれば多いほう」と言われていた。希望者が伸び悩み伝統の継承が課題になる中で、橋本さんたちは「時代に沿ったより良い形に変えていくのが、伝統を継ぎ、守るということではないか」

伝統の姿で応援歌を響かせる松本深志高「応管」の生徒たち

工夫重ね「厳しい」イメージ払拭

と考えるようになったという。

髪色を自由にし、ネイルも解禁。応援への強い思いさえあれば、「自分らしさ」を変えずに入れるようにした。現在は3年生5人、2年生16人、1年生10人が所属する。

一方で応援のスタイルは維持する。黒いマントをひらひらとはためかせる「ヒラ」や、和太鼓を力強く鳴らす形は変えていない。バンカラスタイルは県外からも注目されている。この日都内から来ていた菅原一範さん（59）は、6年前に「何だあれ、面白い」と魅せられ、ほぼ毎年通っているという。

野球部保護者会長でOBの前山和志さん（56）は「自分が球児のころから変わらず応援してくれている」と話して見守り、伝統が続くことを願った。この日の試合で野球部応援が区切りとなった橋本さんは「これからも時代に合わせたり方を考え続けてほしい」と後輩たちにエールを送った。